

オープン
カレッジ

名古屋市中営地下鉄東山線の覚王山駅から、東に向かつて坂を下ると、椋山女学園大学附属小学校が見えてくる。小学校の運動場には、ビオトープ(Biotop e)が設置され、その中心は、湧水を利用した小川に似た形状を持つ人工湿地である。ビオトープの水はやがて山崎川に入り、伊勢湾へと注ぐ。すなわち、椋山女学園大学附属小学校は都市部にありながら水源を持つ学校といえる。私は小学

日本のビオトープ

験や環境教育を実践してきている。
さて、このビオトープという用語、どのような意味であろうか。手元の英和辞典(小学館)では、「小生活圏:ある動・植物が共通の生活環境を持つ地域」とあり、わかりにくい。そこで、陸水学辞典(講談社)を参照してみると、「本来は生物学の分野で、生息場所、あるいは生物とのかかわりのある環境を意味する語」ともちいられてきた」と定義されている。ハビタット(habitat)や生態系(ecosystem)と意味が重なる学術用語の一つである。しかしながら、日本では、この定義とは異なる意味で理解されているのではないだろうか。国立環境研究所の西廣淳博士は、生態学辞典(共立出版)において、「(ビオトープは)日本では、環境修復やミチゲーション(mitigation)で創造された空間や、都市域に創造された生物生息空間を指す用語として、1990年代に入ってから盛んに用いられるようになった」と述べ、本来の意味から離れ、人工的に創り出された生物の生息環境を意味する用語に変化してきたと指摘している。

つまり日本のビオトープは、身近な自然体験の場として、一般的には公園や学校の敷地内に設置された人工の自然環境を指す用語に変容した。その構造は、池や小川を中心に据え、それらの周囲に草本や木本の緑地を組み合わせた景観が主であり、そこからビオトープ池、学校ビオトープといった新たな名称も派生している。

興味深い

意味の変容

校の子どもたちや大学生たちと授業で、あるいは愛知県の市民講座で、このビオトープを利用して、自然体



椋山女学園大学
教育学部准教授

野崎 健太郎

のさき・けんたろう 専門は陸水学、科学教育。京都大学大学院理学研究科植物学専攻。博士(理学)後期課程修了。博士(理学)

なる学術用語の一つである。しかしながら、日本では、この定義とは異なる意味で理解されているのではないだろうか。国立環境研究所の西廣淳博士は、生態学辞典(共立出版)において、「(ビオトープは)日本では、環境修復やミチゲーション(mitigation)で創造された空間や、都市域に創造された生物生息空間を指す用語として、1990年代に入ってから盛んに用いられるようになった」と述べ、本来の意味から離れ、人工的に創り出された生物の生息環境を意味する用語に変化してきたと指摘している。

つまり日本のビオトープは、身近な自然体験の場として、一般的には公園や学校の敷地内に設置された人工の自然環境を指す用語に変容した。その構造は、池や小川を中心に据え、それらの周囲に草本や木本の緑地を組み合わせた景観が主であり、そこからビオトープ池、学校ビオトープといった新たな名称も派生している。

よく似た意味の変容としては、エコロジー(ecology)も挙げられるだろう。本来は「生態学」という生物学の一分野を示す学術用語であったが、今の日本では、「エコ(エコロジカル)な生活」といった使い方で環境問題を意識する、といった文脈で使われている。ビオトープにせよ、エコロジーにせよ、なぜ、このような意味の変容が生じたかについての定説は無いようである。日本人の言葉に絡む柔軟性、誠に興味深い特性と考えている。